



Title	近代日中における「発」を含む二次漢語の成立と交流について [全文の要約]
Author(s)	畢, 亜莉
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15995号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/92387">http://hdl.handle.net/2115/92387</a>
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	<a href="https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/">https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/</a>
File Information	Yali_Bi_summary.pdf



[Instructions for use](#)

## 学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士(文学)

氏名：畢 亜莉

### 学位論文題名

近代日中における「発」を含む二字漢語の成立と交流について

歴史上、日中両言語における漢語語彙の交流はおおまかに3つの時期に分けられる。一つは、奈良・平安時代以来、漢籍や漢訳仏典によって受容されたもの。『類聚名義抄』『篆隸万象名義』『一切経音義』はこの時期の漢字字書である。この時期の日中両言語の語彙の交流は、中国から日本へ輸入するという一方向のものであった。もう一つは、文明開化に伴って新しい西洋知識や概念を表すものを受容されたもの。日本は明治維新を通して、大きな成果を得た。日清戦争後、中国はいち早く、西洋の先進技術を学ぶため、「同文」である日本へ留学生を派遣し、20世紀に入ると、日本語の漢語語彙が中国語に大量に逆流した。第3期は、1980年代から現在までの期間に受容されたものである。この時期は、日中国交正常化、中国の改革開放政策の実施により、日中両国間の政治・経済・文化における交流は新しい時期に入り、日本語の語彙も文化の交流や貿易を通して中国に伝来した。このような状況で、日本語と中国語には数多くの同形語が存在する。

1842年、中国アヘン戦争の失敗や1853年、ペリー黒船来航などの原因で、日本は鎖国の状態を終え、その後、明治維新が実施され、積極的に西洋の先進技術を学び、学問も蘭学から英学へと移行していった。日本の政治、社会、経済、文化などあらゆる面に大きな変化をもたらした。近代化とともに、経済の面では殖産興業、文化の面では文明開化、軍事の面では富国強兵の政策を出した。これ以外に、欧米への留学生の派遣や岩倉外交使節団の派遣など、近代化知識の取得に工夫した。これによって、日本は近代化と共に、学問分野での学術用語も整備された。

一方、1895年に日清戦争で敗北した中国は、明治維新により急速な近代化を遂げた日本に対して、梁啓超らの知識人は、中国と日本とは同じ文化や民族的な起源である「同文同種」であり、日本を学ぶのは近い道だと提唱した。19世紀後期に、清朝は留日学生、海外使節団、駐外公使参事官を派遣した。これらの留日学生たちが、日本の各科目の教科書・専門書を翻訳したり、日本で新聞を創刊したり出版物を刊行するなどによって、大量の日本製用語が中国語に移入された。

このような背景で、この時期の時代語や流行語が数多く存在する。先行研究には、近代化を推進するために、使用された時代漢語は「文明開化」「人力車」「自転車」「銀行」「瓦斯灯」のような近代具象概念が挙げられる一方、「進化」「革新」「情熱」など近代の動向に合致する語、近代社会における概念や技術進歩、社会の変遷などを表現するために使われる語も挙げられる。しかし、時代漢語に関する先行研究は、この時期の具象概念に関する研究が多く、時代を反映する「発、興、活、進、開、展、奮」に関する語、及びこれらの語を語基として造語された語に関する研究はまだ不十分である。

本論文は序章、終章、9章の本論からなる。各章の内容の要約を以下に記す。

第1章では、先行研究とその問題点を指摘し、本論文の研究課題を示した。まず、近年の近代日中語彙の交流に関する先行研究を「近代日中語彙交流を体系的に論じた研究」「近代日中漢語の成立と伝播の語彙史の研究」「近代日中辞典類における語彙研究」「近代日中漢語語構成の研究」「近代日中漢語の字順に関する研究」5類に大別した。それから、時代にふさわしい漢字「発」に関する先行研究と近代日中語彙に関する先行研究の問題点を次のように指摘した。(1)日中における近代化を推進した漢語は検討の余地がある。(2)新時代を作った漢語や新概念は検討の余地がある。(3)近代日中漢語の語構成は検討する余地がある。

第2章では、中国語の「发」を含む二字漢語「AB」412語、「BA」228語、全部で640語、日本語の「発」を含む二字漢語「AB」147語、「BA」119語、全部で266語を抽出した。その中に、「日中同形」138組、「日中同素異順」63組を確認した。

第3章では、第2章で確認された日中「発」を含む二字漢語における日中同形語を考察したものである。その中に、「漢籍・仏書に出典あり、近代的な意味がない」54組、「漢籍・仏書に出典あり、近代的な意味がある」35組、「漢籍・仏書に出典なし」9組となり、「発」を前部要素とする語の生産性が高いことがわかった。また、「漢籍・仏書に出典あり、近代的な意味がある」に、語基「発」は「育てる、伸びる、成長する、発展する」のような外から内への成長の意味変化があり、この時期に造出された語彙は西洋新概念による影響ではないかと考えられる。それ以外に、大別された3類の漢語を2組ずつ考察した。

第4章では、第2章で確認された日中「発」を含む二字漢語における日中同素異順語を考察したものである。整理した結果、A類「日中同形+日中両方逆転」16組、B類「日中同形+日中一方逆転」10組、C類「日中一方逆転+日中同形」24組、F類「日中逆転」13

組となる。また、これらの語において、現代日本語と中国語に使われていたのは7組あり、辞書の記述によると、日本語と中国語の両語の字順を逆転すると、意味と品詞性も変わる可能性が高いことがわかった。

第5章では、日本語における字音語素「発」を含む二字漢語を考察したものである。「発」語彙の用例の初出年代の調査によって、1854年から1912年までの間に、「発」語彙の造出の比率が高いことがわかった。その内因は、「発」の訓読みが多く、同訓異字も多く、このような漢字は日本語における造語力が高いからである。外因は、まず、この時期に、日本語の文体は漢文訓読体であり、漢語の造出が多くなった。次に、この時期の日本政府は近代化を図るため、文化の面では文明開化、国内で殖産興業、海外で富国強兵の政策をとったことで、開発・発展・発達していく近代文化にふさわしい語が時代の要求と一致したと考えられる。

第6章では、日中同形語「発展」の日本語と中国語における成立と受容を考察したものである。古い資料における「発展」の使用状況と近代日本語における定着の経緯、および「発展」の中国語における成立と定着を考察した。調査の結果、「発展」の日本語における初出は1872年中村正直による『自由之理』であり、「発展」の日本語における初期の用例は自由民権運動に影響を与えた翻訳書(ミル『自由論』on liberty)と政治領域の翻訳書(スペンサー社会進化論による影響)であることがわかった。20世紀に入ると、中国の留日学生が「発展」を刊行物通して中国に運んだ。1912年、中華民国の成立で、「発展」は国民生活と密接な農林工商と関連した語句や国家のインフラ整備と関係する語句と共起することで、国語辞書にも登録するようになった。

第7章では、日中同形語「開発」の近代日本語と中国語における使用状況を考察したものである。「開発」は、最初に仏教用語として使われ、その後一般語として使われるようになった。明治期になると、西洋新概念「develop・development」は、日本語における伝播することで、古典語である「開発」は近代的な意味を獲得し、その後、この新しい意味を持つ「開発」は中国語に逆流入された。

第8章では、「発展」の基本語化と類義語との比較を考察したものである。「発展」と「開発」の近代雑誌『太陽』コーパスにおける使用頻度の推移、その類義語群年次別使用頻度の調査を通して、「発展」の基本語化とその類義語との比較を考察した。「発展」は日本語において、他動詞の用法から自他動詞両用へ変化し、自動詞の用法は「公私」「事業」での分野の増加と関わるということがわかった。これはこの時期に、明治維新により、文化経済軍事

の面で、大きな成果を挙げたからと推測できる。「発展」の基本語化は、「発出、舒展、発頭、顕露」の廃語と「開展、生長、開発、進み」の使用頻度の減少と関わりがあると考えられる。「開発」した後、新しい段階としての「発展」は、積極的な意味合いが強化されたことが明らかにした。

第9章では、日中同素異順語「発刊-刊発」の日本語と中国語における使用状況を考察するものである。中国語において、〈发刊〉と〈刊发〉は明代から使い始め、〈发刊○○〉〈○发刊○〉〈○○发刊〉の形で使われた。日本語において、「発刊」は1877年から「本を発刊せられ」の形で使われており、その後「創刊する」の意味も獲得し、1902年の《順天時報》に使用されたことで、この意味は中国語にも使われるようになった。しかし、現代中国語に〈发刊〉は単独に使わず、代わりに〈刊发〉は一般的に使うようになった。一方、日本語における「発刊ノ辞/詞」が多用されており、その影響で〈发刊詞〉も中国語に定着した。

以上のことから、本論文は、時代にふさわしい漢字「発」を取り出し、近代日中における「発」を含む二字漢語の成立と交流を実証的に明らかにした。この研究を通して、近代漢語の概念史・語彙史の研究や語構造の面にも意義があると考えられる。